

はじめに

音楽理論書を最後のページまで読み通すのは、多大なエネルギーを要するものです。まず第一に、出現する言葉がいちいち難しい。“ミクソリディアン・スケール”とか“ダイアトニック・コード”とか書かれていても、日常会話にそんなのはほぼ登場しないので、ピンとくるほうがどうかしてます（言い過ぎ?）。

自分の経験も含めて言いますと、音楽理論書を買ってくる→読破したらジャズだって理解できるに違いない!→数ページめくったあたりで難解な音楽用語が増加→頭がボーッとしてくる→ギャグのひとつも入ってないので眠たくなる→だんだんページを飛ばして読み進める→ますますわからなくなる→本を書棚に置く→数年間オブジェと化す→古本屋に売り飛ばす、もしくは一縷^{いちる}の希望として飾っておく……という末路をたどるようです。本書はそういう人や、最新機能付き携帯電話のマニュアルなどを読むのがどうしてもめんどくさい、と思うような人に向けて書かれています。

音楽理論書に登場する耳慣れないスケールやコードも、その響きはすでに耳にしたことのあるものです。音の響きではなく、その名称に凹んで先に進めないって、なんか本末転倒的で悲しいですよ。だから用語につまずいて頭がボーッと

しないように、なるべく身近な例も交えて紹介していくようにしています。付録CDは、用語だけがひとり歩きしないよう、恐縮ですが僕の声による説明入りでいろんな音を収録しています。

本書の最大の特徴は、先生と生徒の会話形式になっているということでしょう。実際に僕が生徒数名を相手にレッスンをやりながら会話を録音し、それを原稿起こしたものが主体になってます。“腹減りましたね、パンかなんか買ってきましょうか?”みたいな無駄な会話は削ってますけど、時代を超えて笑ってもらえるような(?)失笑ギャグとか盛り込んでます（いくつかは却下されましたけど……）。そんなわけなので、気軽な読みものだと思ってつらつら読んでもらえればコレ幸いです。この本で音楽理論のイメージがつかめたら、『らくらく理論ゼミナール』や『最強のギター・アレンジ・ネタ帳』などを読むとより深くわかるとか。あ、すいません、それは自分の出した本でした。

飽きたらクリックひとつで飛ばしてしまうという時代なので、読まないうちからすぐページをめくられないように、こちらとしても必死に工夫を凝らしています。その最たるモノが“手書きの図版”です。実は、焼肉店の看板やメニューが手書

きになっているのと同じです。聞いた話ですが、人の手が入っているモノとかは、関心が長時間保持されるらしいです。文字も全部手書きで!とも考えましたが、それはペン習字教室に通ってからと、いさぎよくあきらめました。ところどころ直線が波打ったりしてますが、全部僕が手で書いた図版なので、その辺はお許し願えればと思います。

音楽理論というのは、音楽用語を並べて整然と提示するのは簡単ですが、平易な言葉で解説するのはすごく難しい。20年近く講師をやっているけど、まだまだ言葉が足りないと思うこともしばしばです。時代の流行も敏感に取り入れつつというところで、今回の“ダイアトニック・コード”の説明については、カエルの生活からひもといてみました。あとはミとファ、シとドが半音間隔であるということを知る呪文?とかも考案しました。まあそんなこんなで、自分もけっこう楽しみながら作りました。

あ、ここまで読んでもらったということは、最後までこの“はじめに”を読んでもらえたということですね。その調子で本書をなんとか読み終えてください。では健闘を祈ってます!!